

## 「キリストは平和である」

2019年02月09日

エフェソの信徒への手紙2章11節～16節 だから、心に留めておきなさい。あなたがたは以前には肉によれば異邦人であり、いわゆる手による割礼を身に受けている人々からは、割礼のない者と呼ばれていました。また、そのころは、キリストとかかわりなく、イスラエルの民に属さず、約束を含む契約と関係なく、この世の中で希望を持たず、神を知らずに生きていました。しかしあなたがたは、以前は遠く離れていたが、今や、キリスト・イエスにおいて、キリストの血によって近い者となったのです。実に、キリストはわたしたちの平和であります。二つのものを一つにし、御自分の肉において敵意という隔ての壁を取り壊し、規則と戒律づくめの律法を廃棄されました。こうしてキリストは、双方を御自分において一人の新しい人に造り上げて平和を実現し、十字架を通して、両者を一つの体として神と和解させ、十字架によって敵意を滅ぼされました。

「著者」は再び、キリストを知る以前のことについて、心を留めるように促している。「あなたがたは以前には肉によれば異邦人であり、いわゆる手による割礼を身に受けている人々からは、割礼のない者と呼ばれていました。」「異邦人」「割礼のない者」という表現はユダヤ人が発する異邦人蔑視の言葉で、ヘイトスピーチである。「著者」は、その内実を、「そのころは、キリストとかかわりなく、イスラエルの民に属さず、約束を含む契約と関係なく、この世の中で希望を持たず、神を知らずに生きていました」と、神を知らず、キリストと関わりなく、希望のない者であったと説明している。「しかしあなたがたは、以前は遠く離れていたが、今や、キリスト・イエスにおいて、キリストの血によって近い者となったのです」と、イエス・キリストの十字架の血によって、異邦人が神に近い者とされた。そして、「実に、キリストはわたしたちの平和であります」と言う。平和とは和解が実現し、共にあるということである。神と関わりのない罪ある者であったが、キリストの十字架によって罪が赦され、神と共にある「平和」が与えられた。この平和は私たちイスラエル人にも同じように与えられている。従って、私と隣人の間にも平和が成立している。それは、イエス・キリストが「御自分の肉において敵意という隔ての壁を取り壊し、規則と戒律づくめの律法を廃棄され」たからである。ユダヤ教の規則と戒律は、「清いもの」と「汚れたもの」を厳しく区別し、差別と敵意という隔ての壁を作り上げていた。「物」の場合は、さほど害はないが、「人」に適應されると、惨たらしい悲劇が起こる。貧しく、病を負った者たちは神の罰を受け、汚れた「罪人」と烙印されていた。こんな残酷な話はないが、律法体系で規定していたのである。イエス・キリストは御自分の死によって、「清いもの」「汚れたもの」を峻別していた律法を廃棄し、罪人を赦し、全てを「清い」と宣言されたのである。「キリストは、双方を御自分において一人の新しい人に造り上げて平和を実現し、十字架を通して、両者を一つの体として神と和解させ、十字架によって敵意を滅ぼされました。」キリストに愛された者として、神に「よし」とされ、互いに新しい人に造り上げられた。そこでは、神と人、人と人との間に平和が実現している。「著者」は、「十字架を通して、両者を一つの体として神と和解させ、十字架によって敵意を滅ぼされました」と、繰り返し、力説している。イエス・キリストを通して与えられた恵みと救いは、この御言葉によって、十分に説き明かされている。教会は、この福音に立ち続けて来た。